

全国同人雑誌最優秀賞 第18回 まほろば賞 発表

第一八回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、全国同人雑誌の三〇〇以上の小説作品の中から選ばれた五作品の優秀作品を対象に、二〇二四年七月三十一日に東京都大田区民プラザ第一会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が深く批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

新まほろば賞となつて以来、「まほろば賞」は、賞状と賞金三十万円および記念トロフィーを贈らせていただくことになりました。特に本年はこれまで多大な御寄附をいただいた木内是壽氏よりまた高島屋特製の美術電気スタンドをまほろば賞受賞者に贈られることになりました。木内氏には厚く御礼申し上げます。

特別賞、河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円および記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後とも全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第18回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「神女」カミンチュ（四人）105号・106号

大城由乃

特別賞

「黄昏の朝」（文宴）139号

藤原伸久

河林満賞

「父のマリア」（ガランス）31号

入江修山

読者賞

「お仙——続番町皿屋敷」（創）20号

高見直宏

優秀賞

「水路」（あるかいど）74号

渡谷 邦

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「中部ペンクラブ」「北斗」「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など全国同人雑誌協会会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」「善鸞」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

リアリズムの領域を超えて

三田誠広

候補作五篇はすべてどこかリアリズムの領域を超えたところにテーマを求めている。現実を見つめるだけでは小説を書きにくい時代になったのかもしれない。満場一致でまほろば賞となった「神女」(大城由乃)は沖縄周辺の離島に広く残っている霊と交信できる神秘的な女性を中心に、土建屋の儲け仕事や、うらぶれた飲み屋の風景、沖縄戦の集団自殺など雑多な要素を盛り込んだ意欲作で、通俗的な話を展開させながらも、沖縄ならではの歴史と現代の様相を見事に描ききっている。この地域の霊媒の存在は衆知の

事実であり、リアリズムから逸脱してもファンタジーにはならず、現実そのものを直視し、深く掘り下げることに成功している。

特別賞の「黄昏の朝」(藤原伸久)は不幸な体験を経て神秘的な霊能を得た女が、喫茶店のマスターや周囲の人々の善意に触れてしだいに回復していく物語で、爽やかなファンタジーとして、リーダーブルで魅力的な作品になっている。登場人物のすべてが善人で、話がつごうよく進みすぎることに途惑いを覚えつつも、作者の話術の巧みに驚嘆するしかなかった。

河林賞の「父のマリア」(入江修山)は隠れ切支丹の地に生まれた女と、隠し念仏が伝わる地域の男が出会うロマンスで、候補作のなかでは唯一リアリズムで書かれているようではあるが、宗教というものが深く絡んでくるところに、独特のムードが感じられる不思議な作品になっている。父の足どりをたどって息子が隠れ切支丹の地を訪ねるという設定に安定感はあるが、いくぶんインパクトが弱くなつた。小説は虚構なのだから、思いきって父そのものを主人公として描ききる冒険をしてほしかった。

惜しくも受賞は逸したが「水路」(渡谷邦)も魅力的な作品だった。一種のドッペルゲンガーなのだが、その種の作品にありがちなもののしさがなく、淡々とした日常性のなかに、妻と似た女が家庭のなかに入り込んでくる。ス



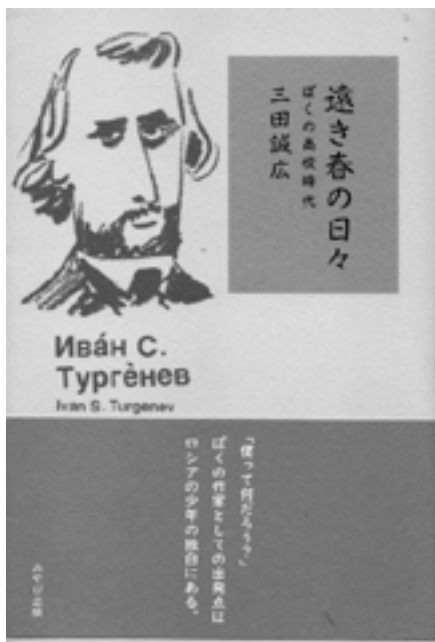
こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めるかたわら
文学修行
88「風の河」で文学界新人賞
を受賞
他の作品に「消える島」「後
生橋」「光の群れ」「火の闇」
などがある

今回も力作ぞろい

小浜清志

今回も力作ぞろいで、選者の一人として読み終えると深いため息をつき呻吟することの繰り返しであった。主に日本文芸山のすそ野は限りなく広がりがつつあるのではないだろうかと楽しい夢想を抱いてしまう。

同郷のよしみとして、「神女」(『四人』105号・106号)大城由乃を最初に読んだ。迫力のある物語の展開と神女(カミメチユ)と言ふ不思議な存在がこの作品を重層なものにしていて、当選作になることに異議は唱えなかった。沖縄の人にしき書けない作品であるが、神女という想像の人物を作り上げたことが必ずしも成功しているとは思えなかった。しかし、作者の作品に対する強い思いは行間からあふれていて読後感



三田誠広文学の原点をなしてみずみずしい輝きを放つ傑作。
みやび出版 1500円+税

も良かった。まほろば賞受賞おめでとうございます。

「黄昏の朝」(『文宴』139号) 藤原伸久を興味深く読んだ。キリコという女性の人には見えないものが見えると言う能力が三年前から突然現れたという。まず、タカシの喫茶店にきて、すぐタカシの左手に白い蛇が巻き付いていると告げられた。タカシはただ茫然となる。「信じてもらえないのも分かっていますが腕をカウンタに置いてください」キリコはそう言うなり、絡まったヒモをほどくように、両手を手首の辺りで動かしている。そして、取れたと言い、「痛いですか?」と聞いてくる。我に返ってみると痛みがきれいになくなっていることに気づく。

キリコの魅力を見せつけて作品が展開するが、読み手を決して飽きさせない工夫もみごとである。キリコの過去も明かされてきて二人は結ばれる予感を残して作品は終わる。私は当選作でもいいと思っていたが、題名の悪さを指摘されると反論できなかった。

「水路」(『あるかいど』74号) 渡谷邦、夫によれば、どうも水路の辺りにわたしに似た女がいるらしい。という書き出しからしてこの作品の異様さが垣間見えるが、わたしに似た女と出会い後をつけていきアパートを知る。翌日わたしはあの女のアパートへむかう。自分が何をしたいのかさえわからなかった。部屋は明かりがついていた。外階段をさがり部屋の前に立った。そのとき部屋の中からドスンと

いう音がして、女の金切り声が聞こえた。慌てて戸口から

離れ換気扇の下に壁に隠れ耳をすます。男の怒鳴り声と女の金切り声がつづき男は出ていった。わたしは女のもとに行き声をかける。女はただ殴られたけどそっけない。わたしは自分の住所と電話番号を書いて女に渡して帰る。何日かして女が現れる。靴を間違えていた事を指摘される。しかし、女はそのまま住みつき、わたしは女の代わりに弁当工場にもいく。変わった人物と奇妙な展開はあるが敢えて作者は深掘りをしようとしないうちに見ることが少し残念であった。

「お仙——続番町皿屋敷」(『創』20号) 高見直宏、夏の怪談話であるお皿が一枚二枚という皿屋敷の物語を見事にまとめた作品で一氣に読ませてくれた。時代物ではなく現代の作品がどうしても読みたと思いました。

「父のマリア」(『ガランズ』31号) 入江修山、隠れキリシタンの女と恋に落ちた父の足跡をたどるはなしである。しかし、恋に落ちた二人の気持ちがあまり書かれていないのが淋しかった。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN」「聖丘寺院へ」「破壊者たち」

女性の感受性と能力

五十嵐勉

今回は大城由乃氏の「神女」が圧倒的で、扱っている題材と、文章の迫力と、ストーリー展開のおもしろさと言、抜きん出ている。沖縄には、東北地方と並んで日本で最も憑依能力の高い風土があり、ユタとかカミンチュはその代表的なシャーマニズムの超能力者だが、この作品によってその世界をよく味わわせてもらった。この能力を小説に展開する作品には初めて接したが、AIが代表する機械化や組織化が進む現代において、むしろこういう世界が異様な新鮮さでダイナミズムを喚起するのはおもしろい現象だと、あらためて反時代的な可能性を感じた。この能力は、歴史の中に眠る怨みや怒り、矛盾や理不尽さや

残忍さを自由に取り出せ、現代に蘇生させることができる。小説というフィクションを武器にする表現方法にとつては、極めて有効な可能性を提示している。この霊媒の能力によって過去と現代を自由に行き来でき、怨嗟や人間の叫びを自在に取り出せる方法装置がここにはある。この方法と舞台装置を使えば、沖縄にある問題を現代に鮮明に浮かび上がらせることができ、血肉を備えた作品として生き生きと歩き出させることができる。例えば、米軍基地の問題にしても、島津の侵略にしても、中国との問題についても、はたまた現代のミサイル基地の問題にしても、この超能力者たちが呼び寄せる現実のシーンとして再生可能になる。私がこの小説と筆者に大きな可能性を感じたのは、それが方法として大きなポテンシャルを備えているからだ。ただ、これを実現させるのは、過去の歴史にもよく目を凝らし、様々な見識と洞察を身に着けて、かつまたそれを表現する高い表現能力を身に着けた上でのことなので、単なる期待に終わる確率も少なくない。ただ私としては、感じる以上可能性に賭けてほしい気はした。

この作品自体について、褒めることはたくさんある。沖縄の裏町の酒場などよく書けているし、不動産業の野心性の絡みもおもしろく読ませる。特に神女の梓が神の森で試練を受ける彷徨いは、ありふれた商業文芸誌にはけっして出てこない狂気と日常の境目が露出している。沖縄戦の少

年の爆弾で粉砕される場面、少女たちの自決場面は迫力があって、強烈な生々しさがあるなど、枚挙に暇がない。また読み終わって、小説的なおもしろさや充実感が残ることも、まほろば賞にふさわしい。一般書店に流通させても、かなり読む人がいそうな手ごたえを感じた。今後がたいへんだが、ぜひがんばって、この世界をさらに生かしていってもらいたい。

今回はたまたま女性の超能力・感受性・宗教性のような共通な力が全作品に通底する結果になって、興味深かったが、特別賞の藤原伸久氏の「黄昏の朝」も、主人公のキリコが他人の病んでいる部分を癒す特別な能力があって、ストーリーの牽引力になっていた。キリコについてはとてもよく書けていて、その魅力が読み手を引っ張っていく。途中からキリコがなぜその能力を身に付けたか、キリコの過去に入っていくところからマスターとの人間も深まり、キリコ自身が癒されてハッピーエンドになっていく。その流れも鮮やかで読者を楽しませるストーリー・テラーとしての筆者の卓越した力が窺われるのだが、私には二つ気になることがあった。一つは主人公のマスターの存在が希薄で、人物として生きていないことである。何を悩み、何に困り、店をどうしたいのか、人物が見えてこない。それが不満だったのと、もう一つは、タイトルで「黄昏の朝」は何を言っているのかイメージが浮かばない。相反する言葉

で示してくれた、優れた作品だった。

渡谷邦氏の「水路」は、別な角度から女性の不思議な感知力を見せてくれた小説である。選考会ではかなり評価が高かった。「自分に似た女性がいる」ことから、その女性に気がなり、近づいていく。その女性がしだいに自分の生活に入り込んできて、互いに入れ替わるように、その女性の働き先に代わりに出ていくようになったりする。その間、絶えず水路に水死体の話が入り込む。幸福と不幸、日常と非日常の間が見え隠れしながら、最後は平穏な日常に戻っていく。非日常を垣間見させて、不運や不安を覚えさせるその手腕は高度なもので読ませる力は横溢しているが、この作品に結果的にインパクトがないのは、幸福の側にあくまで留まり、けっして負の領域には転落していかない安全さの側に書き手がいるからだろう。ちよい見せの手腕はすばらしいが、どこまでも勝ち組の側に留まる姿勢に、人生には絶えず待ち受けている落とし穴の恐怖が本格的に伝わってこない恨みがある。この側に足を踏み入れ、しっかりと書けるようになれば、おそらくこの作者は飛躍すると思われる。期待度と言う点では、大きなものが残った。

全体を通して、今回も充実した読後感を覚えた。まほろば賞の作品は商業誌のレベルを凌駕する同人雑誌の実力を世に示している。今後も同人雑誌の情熱ある創作の力を期待したい。

なので、無理がある。たとえば「キリコの段ボール箱」のようなタイトルなら、おもしろみも増したように思った。

河林満賞の入江修山氏「父のマリア」も女性と宗教の問題を骨格にしている。薬売りの父が行商先で知り合った恋仲の女性と愛を誓い合うが、宗教の違いから、結ばれることなく、別の道を歩む。しかしその誓いは心の奥で守られ、女性は生涯独身を貫き、薬売りの男は別な女性と結婚するものの、息子にその女性の名前を付けて誓いに添う。息子が晩年の女性の元をはるばる訪ね、女性の一途な貫きを、自身の名に重ねるというストーリーは、海上での光の中の逢引が昇華されて、美しい。貫きが生きる道筋に光り残る作品だった。

読者からの支持が最も多かったのは、高見直宏氏の「お仙——続番町皿屋敷」である。この作品は岡本綺堂の「番町皿屋敷」を下敷きにしているものの、そのあとの独自のストーリー展開と文章力はすばらしい。井戸からお菊の亡霊が皿を数えて現れるシーンは、思わず背筋がゾッとするほどの出来栄で、この卓越した文章力だけでも何かの賞に値する。また権次やそれが憑依したと見られる野良犬など周囲の人物や動物の描写もメインの流れをしつかり支えていて盛り上げている。お菊の恋の成就への落ちも、真弓というしつかりした女性の存在も、それぞれに配置の妙を醸して、成功している。時代小説の可能性をあらため



なかみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミヤンマーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のブレンカ」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語になるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中上健次と熊野—」(河出書房新社)「アジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

女性たちの不思議な力

中上紀

二〇二四年も暑い夏の盛り、「まほろば賞」の選考会が大田区民プラザにて行われた。三田誠広、小浜清志、五十嵐勉各選考委員の方と久しぶりにお目にかかったが、皆さんますます健康で精力的にお仕事をされ、暑さ負けしつづあった私は圧倒されるばかりだった。

さて、素晴らしい候補作五作を読ませていただいた。今回の作品はすべてにおいて人間ドラマがことさら色鮮やかに描かれていると思った。読みながら何だか、あれもこれもAIに頼るのではなければスマホ内でクリーンに補正、完

結され、汗臭く汚く不格好な人間であることがまるで罪であるかのような今の日本で息をする私たちに対して、痛烈な皮肉が突きつけられているようにも感じた。

また、五作品に描かれた、切腹に心霊、ドッペルゲンガー、シャーマニズム、神女、薬売り、隠れキリシタンに隠し念仏と言ったものの特殊性にも注目したい。普通に暮らしている限り、触れる機会ほとんどない要素である。だがこれらはファンタジーではなく、歴史のどこかで、あるいは今でも地方のどこかで、確実に起きた、あるいは生きて存在している要素でもある。

高見直宏氏の「お仙——続番町皿屋敷」は「まほろば賞」の候補作には珍しい時代小説であるが、ここで冒頭から扱われる播磨の切腹に至る経緯は、怪談にもなった「皿屋敷」の話をもとにしたドロドロの愛憎劇だ。しかしながら、屋敷で働いたお仙が自分が生き残るために告げ口をしたことや、実は皿を一枚盗っていたということなどは、非常に人間的であり、現代にも通じるリアリティがある。ただ、お菊と播磨の恋愛そのものの様子をもっと読みたかった。その部分があれば、お菊がどうしてそこまでのことをしたのか、より心を重ねられると思った。ちなみに、「まほろば賞」候補作にはよく動物が登場するが、この作品でも犬が大活躍し、大いに読ませる場面であった。

ドッペルゲンガー、つまりそっくりな顔の人物について

を深め、やがて船の上であいびきをする仲になるが、「隠し念仏」の宗教を背景に持つ和一とキリシタンの文は最後まで理解し合うことが出来ない。その越えられなさがとてもし痛々しく描かれている。だが注目したいのは、抱き合ったまま小船に乗って流されて行く場面である。それはまるで熊野那智の浜でかつて行われた補陀落渡海の死出の旅のようで、宗教に阻まれた愛なのに多分に宗教的だ。二人は助かったが引き裂かれ、何十年も経った後に息子の文夫はその話を聞き、自分の名前に二人の愛の証を見えるというラストよりも、その流れている場面に感動があると思った。

「特別賞」を受賞した藤原伸久氏の「黄昏の朝」では、キリコという不思議な力を持つ女性を軸に話が進む。喫茶店が磁場となっており、そこで冴えない見た目をした彼女は多くの人々を癒すが、並行するように彼女の痛みも明かされていく。キリコは、皆のことを癒しながら、実は自分が癒されていたのだらうか。本作は読み応えのある場面も多く、「ペンギンの合唱」など、動物の描写も楽しい。彼女自身の痛みの中心である事故死した息子の話をしたのち、キリコは美しく明るい女性に変貌していく。女性の持つ霊力あるいは何らかのパワーを、小説として語る「意味」のようなものを強く感じさせた作品だった。

宗教や風習、あるいは工場の勤務の中身など、なかなか知ることのできないことにも触れられたことも、今回の「ま

描いたのは渡谷邦氏の「水路」だ。自分に似た女をずっと追いかけていくという行為は、否が応でも読み手のページをめくる手を速まらせるだろう。進んでいく道が、綺麗な遊歩道から、どんぐんぬかるみのような路地に変わっていくのもいい。途中で「気をつけろよ」とか「誰々が水路に落ちた」などと言ってくる奇怪な老人の存在も、異世界の入り口に立つ、地獄の番人のように絶妙だ。そっくりな顔の女はやがて主人公たちの家にやってくるようになり、やがて工場勤務の女に代わって主人公が働いたり、「取り替え」のようなことが行われる。その間に女が主人公の夫と関係を持つのではないかと下世話な想像を読者はするかもしれないが、残念ながらそれは起きない。だが工場では顔をすっぽり覆う服装が課される。誰だかわからなくなるということは、誰にでも交換可能、つまりこれは、誰の心の中にもある欲望の一つなのではないか。主人公はそこですでに女になり変わっており、女は主人公になっているのである。工場から出てきたのが女なのか主人公なのか、誰にもわからない。それはある意味、男女の関係を持つと同じことだ。

「河林満賞」を受賞した入江修山氏の「父のマリア」では、そこに描かれる薬売りという仕事の奥深さと過酷さがまず目を引く。主人公の父、和一は薬売りとして隠れキリシタンの居住地に出入りしながら、文という若い女と親交

ほろば賞」の収穫と言えるだろう。また、特筆すべきことは、それぞれの作品で女性を中心となっているということだ。そればかりか、不思議な力を持っている女性も複数いる。それは、男性がある意味こうした何らかの「力」のある女性に、どこか依存している、それが今すぐく見えてしまっている時代だという意味かもしれないと思う。

その中でも現代に生きるある女性の問題から繋がる形で、沖縄に伝わる神女という伝統の信仰、シャーマニズムそして戦争の時代とリンクしている大城由乃氏の「神女」に最も高い票を入らせていただいた。

文字の一つ一つに、神がかったものを感じたのもそうだが、やはり今広く読者に伝えるべき沖縄戦の歴史、凄惨な事実として、もしかしたら、当事者がまだぎりぎり存命している今だからこそ、リアルなボイスとして伝えられる最後のチャンスかもしれないということ、それを女性ならではの繊細な視点、名前は変えられているが久高島と思しき離島に生きるシャーマニズムを通して有無を言わさない説得力として、記されていると思った。特に、幼い娘の片方の目を失わせてまでの神がかりには、驚きを隠せなかった。フィクションにしかできないことであるが、それでも虐待、ハラスメントを問われる可能性を恐れずここまで書くということ、作家が書きたいものを書けなくなってきた昨今の風潮に一石を投じるようでもある。最後まで迫力

のある作品だった。

スマホ化した都会の日常で私たちが失った何か、もはや物語でさえも伝えることが難しくなってしまったものを真摯に伝えるということ。また一つ、小説の役割というものを感じた。選考会後、打ち上げの席で、五十嵐勉氏が「まほろば賞」を受賞した「神女」の著者大城由乃氏に受賞の連絡をする際に、ひとことだけお祝いをお伝えさせていただいた。沖縄の太陽の下の波のように優しくおらかなお声に、私も元気を貰った。



第18回まほろば賞選考会風景 2024.7.31 大田区民プラザ第一会議室にて

まほろば賞

「神女」

カミンチュ

(「四人」105号・106号)

大城由乃



今回は特別贈賞として、木内是壽氏より御寄附いただいた高島屋製デザイン電気スタンドをお贈りします。

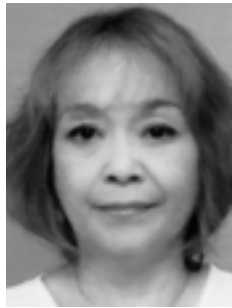


まほろば賞 受賞の言葉 大城由乃

このたび、身に余る名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございました。

吉報をお受けさせて頂いた時の驚きは、これまでの人生の中で最も大きなものでございました。同時に大変光栄に思いました。これもひとえに「四人」の同人誌と合評会などに於いて、同人の方々から多くの学びと御指導を賜りましたお陰でございます。

また先生方をはじめ他の同人雑誌の秀作を拝見させて頂く機会にあずかったことも、大いに勉強になりました。今回の受賞を励みに、「まほろば」という言葉にふさわしい作品を書いていけるよう、これからも邁進していく所存でございます。このたびは誠にありがとうございました。



大城由乃
おおしろ よしの
1961 沖縄県旧糸満町生れ
97 飲食店経営の傍ら詩作
2015 頃より小説を手掛ける
21 同人誌「四人」入会
沖縄県在住

特別賞 受賞の言葉 藤原伸久

選んでいただきました。有難うございます。誰も見向きもせず、新聞の書評にすら取り上げられることのなかった作品が特別賞に選ばれるとは!! まさに驚天動地、寝耳に松竹梅でございました。ゼロではないが何物にもなり得ない私の小説もようやく日の目を見たやらないのやら……。ふだんは野山を駆けずり回り、言語からはるかに遠ざかって野放図に生きております。光と影、花と枯木、妄想と理想が洗濯機の脱水槽のように渦まいて日常でございますが、その中で書くことが独立して単一化され、それ故救われることの多い毎日であります。今日も小説の舞台となった水族館前で、飼育員さんと話しながら魚を釣り、アシカの声を聞いておりました。形あって定まらぬ生活の中でポツリポツリと題材を拾い集め、定まらずして形をなす小説を書いております。人生は小説よりもフィクションを体現すべくこれからも精進流転いたす次第でございます。謹白。

まほろば賞

特別賞

「黄昏の朝」

（「文宴」139号）

藤原伸久



藤原伸久

ふじわら のぶひさ

「文宴」同人
中部ペンクラブ・津文研会員
三重県文学新人賞・同奨励賞受賞
中部ペンクラブ賞受賞
原稿はすべて手書き
トライアスロン・登山・ボルダリングなど多才



風媒社 1500円



まほろば賞

河林満賞

「父の MARIA」

（「ガランス」31号）

入江修山



いりえ しゅうざん

1951 宮崎県生まれ
30代に福岡県で塩野実（松原新一）氏の文学学校に学び、同氏主宰の「河床」同人として小説を本名で連載する
51歳で脱サラ就農し、有機稲作農業経営の傍らに随筆と小説を「ガランス」に投稿する。同誌の会員となり、近年は郷土史を基にした作品を筆名で創作している

河林満賞 受賞の言葉 入江修山

この度の受賞を、まことにありがとうございます。思いも掛けない入選と受賞です。これは、わたしの力ではありません。貴重な文献を書き残された先学諸氏と雑誌「ガランス」及び梓書院の編集の方々、さらには、図書館・資料館・博物館・文化財係の方々から頂いたお力とご支援のおかげです。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。やむに已まれない思いで書いてきて、七十代の老境となりました。

自分が終焉を迎えるであろう土地の歴史を紐解いて小説にしたいと考えて四年目になります。今後もある限り、郷土史小説の創作に励みます。



まほろば賞発表



入江修山

まほろば賞

読者賞

「お仙」——続番町皿屋敷

(「創」20号)



高見直宏

読者賞

受賞の言葉

高見直宏



高見直宏

たかみ ただひろ

1962 静岡県浜松市生まれ

愛知県名古屋在住

2018「弦の会」同人

20「掌編小説ムーの会」に加わる

23「創」に加わる

思いがけない評価を頂き、身が引き締まる思いです。本作は岡本綺堂著「番町皿屋敷」の続編として創作しました。書き出し、キャラクターを継承し、伏線まで「番町皿屋敷」を基にしました。この場を借りて、亡き岡本綺堂先生に御礼を申し上げます。

「ありがとうございます」

未熟者ですが、今後も精進を続け、本作を超える作品の創作を目指します。読者の皆様、文芸思潮様、同人の皆様には感謝します。



まほろば賞

優秀賞

「水路」

(「あるかいど」74号)



渡谷邦



渡谷邦

わたりだに くに

1955 広島市生まれ

岡山大学法文学部仏文科卒業

2013 年大阪文学学校入学

21 年より「あるかいど」同人

岡山市在住



●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のような結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

作品名 投票者	水路	お仙—— 続番町皿屋敷	カミンチュ 神女	父のマリア	黄昏の朝
高村豊子	20				
名村和実		200	50		50
今田真理子	10			10	10
小野さとみ		10			
高見泰子		50			
山田まさ子	4	2	5	6	3
渡辺恵理				30	
西田宏明			30		
山本一	5		20		5
渡辺正樹		10		10	
合計	39	272	105	56	68

*読者投票合計540点5万4千円を各得点合計によって各著者に読者賞賞金として比例配分させていただきます。

二〇二四年まほろば賞 読者賞はこう投票した

■小野さとみ

全五作品を読んだ感想を記します。

●「水路」渡谷邦

虚実ない交ぜの描写が大変素晴らしく、主人公の女性と顔がそっくりと評される女性とが、同一の人物に混ざり合っていくような場面は面白く読んだ。ミス터리要素もあり頁をめくる手が止まらなかった。

●「お仙——続番町皿屋敷」高見直宏

番町皿屋敷を下敷きに二次創作しているとは言え、内容はほぼ新たなストーリーである。主人公が霊と対峙する場面の描写は映像が浮かぶようで、そのまま映画になってもおかしくないぐらいの筆致である。

●「神女」大城由乃

沖繩戦の悲劇は今なお続いているのだと改めて感じさせられる物語である。後半、神女である梓が住宅開発した地に残る霊魂を鎮めるシーンは壮絶であった。

●「父のマリア」入江修山

隠れキリシタンの悲劇を現代にまで落とし込んでストーリーを展開させているところが素晴らしいと思った。惜しむらくは視点が息子↓父親↓息子という額縁小説となっているが、その境界が少々分かりづらかった。章立てが工夫されているのもよかった。

●「黄昏の朝」藤原伸久

軽いタッチで軽妙なやりとりが楽しい作品。キャラクターがそれぞれ立っていて、皆魅力的。見えない物が見える女性という設定も無理なく語られており、読んでいてこの女性に感情移入させられた。

■名村和実

②「お仙——続番町皿屋敷」③「神女」⑤「黄昏の朝」の三つ巴だな、と思いました。

④「父のマリア」は、取り上げた題材は、興味あるとていいものですが、説明的なところが感じられる。文夫の語りで父の木原和一物語になっているので、どうしても文章のふらつきが感じられる。

①の「水路」は、妻が女と入れ替わり勤めに行きだすところは、大変面白かったが、そこをもっと書き込み、人間の奥という心の深みにまで達するものが欲しかった。

⑤「黄昏の朝」見えないものが見える高橋キリコが店にやってきて勤めるようになる。はじめは、見えないものが見える不思議な能力の持ち主を書いた小説であろうと思って読み進めたが、後半に至って、実はキリコには深い心の傷が、猫も抱けない心の傷が隠されているのであった。店に来るお客さん達との交流も手伝って、徐々に心の傷が癒されていく。いつしか不思議な能力も消えていく。後半に読みどころがあった。文章もしっかり書きこまれているのでよかった。

③「神女」カミンチュ 不動産会社と沖繩開発に伴い、久遠島に残る神

女の家系仲村屋の梓、母の京子、祖母、そして梓の子、二歳のユキと開発会社の専務池野と、社長の武志の目線で物語は進む。沖繩土着の信仰は、芥川賞李琴峰小説で少し知ったぐらいであったが、この小説で存分に知ることができた。そして最後、開発会社の専務池野の祖父、つまり先の戦争末期、沖繩戦の悲惨な最後の数々に結びついていくところは、その筆力も確かなだけに圧倒された。

②「お仙——続番町皿屋敷」は、とにかくこんな有名な幾つも話のある作品を、登場人物の年代や設定など納得できるように変えて、これぞが番町皿屋敷の続編として作りあげた。その勇氣と自信に敬服した。最後の方、権次が犬になって現れ、怨霊とのやり取りのなか真相が徐々に浮かび上がってくる。最後の一枚の皿は、お菊手討ちの夜、お仙がこっそり隠しもって田舎に持ち逃げしていたと。ここに怨霊ではない現実の皿一枚が存在することになる。小説でしか表現できない実態がある。地の文、描写、会話のバランスが良く、読者を退屈させない。筆力もあるし、この作家は時代物ばかりでなく現代小説も次々書いているのを見ている。

配点は②「お仙——続番町皿屋敷」200点、③「神女」50点、⑤「黄昏の朝」50点とした。

■高見泰子

「お仙——続番町皿屋敷」感想

描写がともかく素晴らしく見事だった。冒頭の切腹と介錯シーンで始まり、出家した十太夫（了春）が青山屋敷に最初

に訪れた時の怪異な情景も目の前にありと浮かび上がってきた。隻眼の犬もこの物語の大事な存在だ。緊迫した情景はもう一度太夫が屋敷に訪れた時にも展開されるが、「どうなるんだ、大丈夫か？」とはらはらドキドキして、どんな物語の世界に引き摺り込まれた。またこのお話には風を感じ、花の香りも漂ってくる。だから清々しいのか？ 皿が井戸から彷徨い出て動き回るのには残りの一枚の行方を探し求めている行動であるとわかった。お菊は恨みで成仏出来なかったのではなく、愛する播磨と一緒にいたための行動だったのだということもわかった。だからこの物語は最後にお菊と播磨の魂が巡りあい、愛が成熟してあの世に共に行った究極のラブストーリーだったのだな、と私は解釈してとっても温かい気持ちになった。

■山田まさ子

第一八回まほろば読者賞2024感想 異世界との間で

日常に潜む邪悪、異世界を、今年のまほろば賞候補作は感じさせてくれた。

●「水路」渡谷邦

読み出してすぐ安部公房の名が浮かんだ。主人公にそっくりな女性が登場したあたりで理由に気がついた。そうか、ドッペルゲンガーだ。安部公房はドッペルゲンガーの登場する作品を書いている。

ドッペルゲンガー、主人公は夫から君にそっくりな人がいる、と聞かされ、夫婦でその女の後をつけていく。汚水のぬ

とは中国から伝わったと述べている。従来の江戸の講談師や落語、歌舞伎に登場するお菊は、お家騒動を背景に、夜な夜な井戸から浮かび上がり一枚、二枚と皿を数えるところが見せ場になっている。

だが岡本綺堂のお菊は違った。怪談でない皿屋敷、お菊の恋を描きたかったと述べている、短気な若殿様は、お菊に本心を疑われたことが悔しくて手打ちにしてしまう。けれども自害を決意した彼を、幻のように優しいお菊が井戸から出迎えてくれる。「恨みも妬みも」なく、「菊、播磨も今行くぞ」死してなした恋の物語である。

なお伊藤大輔監督の映画「番町皿屋敷 お菊と播磨」（一九五四）も綺堂作品を元にしているので、観てほしい。

「お仙——続番町皿屋敷」は、岡本綺堂作品の精神を受け継ぎ、台所仕事のお仙や、奴の権次にもスポットをあてている。高見氏の工夫は、ことに権次の描き方である。主君の後を追いつ害した彼は、足の悪い犬となり生まれ変わっている。忠犬のように主人公了春を助けようとする。

もう一つ現代的なのは、主人公にお菊手打ちへの自責をいだかせていることもある。

了春の祈り、魂鎮めはうまくいき、菊だけでなく、権次も天へ、お仙も声を取り戻して元気になる。作者は主君の恋の成就だけでなく、仕える者にも幸せになってほしいのだ。

●「神女」大城由乃

沖繩リゾート開発地に次々と起こる怪に、神女と呼ばれる

かるんだ道と、水路。

追いかけるうちに、安アパートに吸い込まれる女の姿に、前夫の暴力に怯えた自分の過去の日々が蘇ってくる。どちらが本物かわからないほど二人の女の姿が重なってくる。

ともすれば過去の自分、もうひとりのわたしにひきこまれそうになる主人公だが、妙に現実的な夫が引き止めてくれる。

この単純な夫の存在が、作品にユーモアを与えている。似た女を夫婦で追いかけたあげく、汚い泥がついてしまうシーンがある。その時夫は、ためらわずに靴の汚れを、公園の遊具である象の鼻になすりつける。それ、子供が遊ぶ象でしようが、と読者は突っ込みたくなる。

こういう他所様のことなどおかまいなし勝手な仕事ができる男だからこそ、日々をあっけらかんと生きていける。ヒロインの封印した過去の苦しみには気づかず、結果、夫が彼女を現実へと引き戻してくれる。自分と妻との小市民的幸せさえあればいい。

だが、その幸せのすぐ隣にぽかりと穴を開けた異世界がある。本作のテーマは日常の隙間、平穏さに潜む危うさ。文章は美しく完成度の高い作品だ。

●「お仙——続番町皿屋敷」高見直宏

皿屋敷伝説は多い。番町皿屋敷、播州皿屋敷、東北から九州まで伝えられ、お菊の打ち掛けまで残っている寺もある。わたしの古里の高知にも二つ皿屋敷がある。

かくも日本人に愛されてきたお菊さんだが、岡本綺堂はも

河林満賞について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。（二〇二二年改訂）

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



神に仕えるものが、除霊をしていく。海にも山にも、第二次世界大戦によって彷徨っている魂がいた。その者らの言葉を聞き、感じ取り、魂を祈りで昇華させていく。

リゾート開発にも、神女を遊び相手としか見ていなかった身勝手な男にも、神女の祈りは恨みをもたない。読後感は何か深いものにふれた気がする。

●「父の MARIA」 入江修山

おおもとのストーリーは、女は天草の隠れキリシタン、男は佐賀、田代の薬売りで隠し念仏、ともに忍び隠れる信心であったが、宗教が違うことから別れねばならなかった。その子が、亡き父の想い人を訪ねていく。

素朴な作品である。物語は語り手が隠れキリシタンの地へ訪ねて行ったところから始まるが、どの描写も綿密であり、わたしはこれは本人の体験ではないかと思つたくらいだ。

父和一の子供の頃の配置売薬の拭き掃除から始まる日々、行李を背負つての見習いなど、父を語ると、ことに作者の筆は綿密さを増す。

これは私小説ではないかと、わたしは何度も思つた。参考文献が書かれていなければ、そう思つたことだろう。

わたしは薬売りの人が紙風船をくれた記憶はあるものの、このような薬屋さんの業務も日常もまるで知らないから、珍しく読ませて頂いた。

表題の MARIA とは、父にとつては宗教の違いから別れなければならず、別れてなお互いに想い続けた文さんを指す。

だがこの作品を通して見たとき、実は MARIA は三人いるというのが、わたしの意見である。

一人目の MARIA は、父和一の母、息子が奉公の厳しさから歩いて帰つてきても追い払う。この場面の、母親が「ほとんど火種の残っていない大きな火鉢の前で」は眼に映る表現で、つましい母の暮らしぶりが伝わってくる。その母が和一が見習いを終えて独立すると、上等の焼き魚で見送ってくれる。息子を一人前に育てたいゆえの厳しさだったとわかる、MARIA である。

もう一人の MARIA は、河岸の色電球のついた宿で「上がつていかんね」と声をかけてきた秋枝。たいした部屋でもなからうに、花瓶に白紫陽花を挿したりする女であった。秋枝は、和一に良い人ができたと知ると、あんたは、いいお客さんよ。それだけよと言ひ、和一の差し出したお金の入った封筒を断る。和一の背中を押して別れを告げ、そのくせ姿が見えなくなる。階段の電灯のそばでしゃがんで泣く。

育ててくれた人、見送つてくれた人、そして虹の下、小舟の中で結ばれた想い人。

三人の MARIA たちは、哀憐だが凛としており、よい読後感をもたらす。

付け加えると、友人の山村は毒舌家だが、どこかドストエフスキーの作品に出てくるようなタイプだ。つまり毒を吐きながら、嫉妬混じりに和一の真実の姿を突きつける。この小説に深みを与えている存在だ。

●「黄昏の朝」 藤原伸久

この小説を読んだのは、ちょうど上野でキリコ展が開かれている頃であった。日本人だと、キリコは女性の名前、それと通称かカタカナとなると、占い師や霊能者にみる名前だ。

本作のヒロイン、キリコも霊能者。しかも霊視するだけでなく、除霊もできてしまう。おどろおどろしい感じではなく、かるやかに、である。

舞台は、神島が見えて水族館があるのだから、鳥羽であろう。ソフトな語り口で、死という重い出来事を語る。淡い水彩画のような色調で、わたしはペンギンたちがハッハッハァーと笑うシーンが気に入っている。

キリコは幼い子を踏切で亡くした過去をもつ。その周りを、白蛇、ペンギン、タツノオトシゴだの子猫だの動物たちがやさしく寄り添う。このにぎやかさと深刻さが混在する姿は、フェリーニの映画のようだ。

今年もまほろば賞候補の作品たちは読みごたえがあった。毎年、真夏の太陽にむせかえりながら、カフェに逃げ込んで、少しずつページをめくるのが、わたしの夏恒例になっていた。ポイントをつけるのは最悪の作業で、ひとつひとつの作品から立ち上る熱意を思うと、わたしは異世界の鬼になった気分がする。

■南崎理沙

私としては、まほろば賞は大城由乃さんの「神女」が良いと思います。「命には、命をかけて立ち向かわねばならない。どちらも覚悟があるわ」という梓の言葉があるように、命のことを過去から現在に続く時間軸の中で自分事として捉えている作品であったからです。戦争の惨禍において死んだ者を単なる他者として捉えるのではなく、自分に乗り移るもの、自分と関わる身近な者として捉えているという描写がしっかりと見受けられました。会社の都合によるもので、現在に接続する物事を通じて歴史に深入りしていく中で、武志に霊が乗り移ることは、武志にとつて戦争が自分事になったことを暗示しているともとれます。また池野においても、全てを他人事として見る視点から「こうなった以上、オレは逃げませんよ」と自分事として立ち向かう姿勢に変わっていくのです。戦争や戦争による死者にどう向き合っていくか、といったことが真摯に描かれている作品でした。途中まで、梓と武志の出会いが都合主義であるのでは、ということや梓が男性が逃れたいものを全て負うような実体のないユートピアとしての女性として書かれているのでは、ということが気になりながら読みましたが、その懸念も後になくなる構成となっています。梓と池野の関係が判明することや、武志が「あいつは男じゃない。男として責任を取っていない」と憤慨する場面において、バランスが取れています。展開においてもテンポがよく、筆力も安定しています。書

あなたも 文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立 90 年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒 102-8559

東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館 5F

☎ 03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

<http://www.bungeika.or.jp/>

く力、主題を選ぶ力、主題におけるアプローチ全てにおいて、今回の優秀作の中で最も優れていると思いました。

渡谷邦さんの「水路」も、不気味な空気が良かった。簡単に答えらしいものを明かさずに、最後までそのひんやりとした怪談めいた雰囲気筆を運んでいく様も面白く読みました。ですが、せっかくそういった雰囲気最後まで引つ張って来たにもかかわらず、「それを言うなら、みんな少し似ているじゃないか」という夫の言葉やその後の描写によって作品のもつ特有の空気が軽く失われ、丸く収まってしまった印象も受けました。人間は皆、似た経験をしており、誰もが自分であった可能性があるという主張は大変有意義です。その主張から、読者それぞれに考えさせるところも光っていると思います。ですが、不気味さと教訓的な台詞は少しアンバランスなように感じます。不気味さで貫徹させていけば、また違った味わいになったかもしれません。加えて、もう一つ気になったことは、不気味に誰かを描く書き方が、一六一回芥川賞を受賞した今村夏子さんの「むらさきのスカートの女」に似ているということです。今村さんの作品では、不気味さに語りの特異性（誰々に似ている、といった人物描写をし、はつきりと言い切らない）を加えることで、不気味さを必要不可欠な要素として扱っていると思います。それに対して、「水路」における不気味さは、終盤における主張をするために真に必要なのかと疑問にも思います。ムードを書くことに関して描写が飛び抜けて優れているとは感じますが、こ



五十嵐勉のカンボジア難民を描いた渾身の力作小説集

御注文はアジア文化社まで

送料とも 1800 円（税込）

の終盤の言葉を主張するのであれば、違ったアプローチ方法でも良いかもしれません。とても良い作品だと感じましたが、そういった点から、「神女」の方が良いと個人的には思いました。

